石垣の基礎

(1) 加工されていない石材

大天守、乾櫓、屋根付通路の石垣の基礎は緩やかな傾斜になっており、文禄 3 年（1594）の築城当初に作られたものである。

石垣の基礎は、近くの山々から切り出した荒削りの岩石で作られている。当時の建築工法は、石を切り出してはめ込み、強固に組み合わせたものであったが、松本城の石垣はほとんど加工されていない。この積み方は「野面積み」と言う。このような石垣は、洗練されていないとみなされる一方で、手間がかからず、早く完成させることができた。石垣には布積と呼ばれる横一列に並べる方法と、乱積と呼ばれる無造作に積み上げる方法がある。~~松本城では布積を試みたが、線がギザギザになり、布崩しと呼ばれる様式になった。~~

(2) 隅石の組み合わせ

松本城の土台の角は、安定性を高めるため、長方形の石を交互に並べて仕上げている。しかし、他の城に見られるような整然とした石組ではないので、松本城の隅角部の石組は、この技法が早くから用いられていた可能性がある。

特徴的なタイル

(1) 雨どい瓦

軒先の隅にある三角形の瓦で、雨水を排水しやすくするために考案された。

豊臣秀吉（1537-1598）の傘下の城が最初に使用した。デザインは、朝鮮半島の建築に使われていた瓦を参考にした。失敗に終わった 1592 年と 1597 年の朝鮮出兵の際に秀吉とその軍勢が、朝鮮半島からこの技術を持ち帰ったと言われている。1600 年、関ヶ原の戦いで秀吉の軍勢を破った徳川家康（1543-1616）は、秀吉の軍勢を城から引き離し、遠隔地に追放した。この移転により、雨落し瓦はさらに他地域の城に普及した。

(2) 防護瓦

昭和 30 年代の修理の際、屋根の各所に平瓦を追加で敷き詰めた。これは、軒先から落ちてくる雪や氷から屋根を守るために設置された使い捨ての瓦である。